

社会主義国家の少数民族(Ⅲ) 一完

森 田 昌 幸

目 次

- 11 コーカサス
- 12 アゼルバイジャン
- 13 アルメニア
- 14 グルジア

11 コーカサス

いわゆるコーカサスと呼ばれる地域は、今日どの辺であろうか。ヨーロッパからアジアにかけての世界地図を開いてみると、カスピ海と黒海とに挟まれた地域が、地峡をなしていることがわかる。この地峡のほぼ中央を東西に走る山脈が、コーカサス山脈である。海拔5千メートル級の山々が連なるこの山脈は、西アジアとヨーロッパ・ロシアとを隔離する天然の城壁である。山脈の南側をヨーロッパ側からみて、トランス・コーカサスと呼ぶ。北側に比較すると、山岳地帯が多い。太古、ノアの箱船がその山頂に留まったといわれるエルヴルウス火山は、海拔5,630メートルである。コーカサス連峰の頂上は常に白雪を戴いており、トランス・コーカサス地方が、永くヨーロッパ文明に接し得なかった原因のひとつをなしている。

ロシアが侵入してくる前には、この地方はペルシア及びオスマントルコの支配下にあった。地理的にイラン、トルコとロシアに挟まれたこの地域は、19世紀半ば頃から、ロシア・トルコの対立が先鋭化するにつれて、その火中にまき

込まれて行った。

今日、この地域には、ソヴィエト連邦を構成する三つの共和国がある。すなわちアゼルバイジャン、アルメニア、グルジアである。これら三国はその地理的条件からも、特殊な歴史を経験しているが、ここではトランス・コーカサスにおけるソヴィエト政権の樹立、といった見地からその歴史をながめてみることにする。

12 アゼルバイジャン

アゼルバイジャンは本来ペルシア領であったが、1813年のグリスターン条約 (Treaty of Gulistan) でロシアの支配下⁽¹⁾に入った。ロシア領アゼルバイジャンが今日のアゼルバイジャン共和国として、民族的に独立するまでには、1917年10月のロシア革命後の大混乱を経なければならなかったのである。いわゆる南下政策の一貫として、アゼルバイジャンを占領したロシア帝国は、その常套手段として、植民地経営のための官僚と軍隊を送り込み、徹底した搾取を実行したのである。現在では、主たる産業として石油があるが、当時は綿花が主力であった。帝政ロシアの植民地政策で、アゼルバイジャン人はこれらの生産物のみならず、労働力も強制使役という形で長期にわたり酷使され、まったくの極貧状態に追い込まれていた。このような苦しい生活が、大体ロシア革命前夜まで続いていたわけである。従って、ツァーリの権力に対する反感は、むしろロシア本国以上のものがあったといえよう。

このことは、ヨーロッパ・ロシアにおいて二月革命の勃発する直前に、辺境植民地において、生活苦から、現地人のツァーリ官僚に対する暴動が発生していることを考えれば、納得の行くところである。この種の暴動は、ボルシェヴィキ労働者によるアジテーションが原因と見る向きもあるが、かならずしもそればかりではない。現に、アゼルバイジャンでは、住民は餓死寸前にまで追い込まれていたのである。

なるほど、ボルシェヴィキ労働者の数もたしかに増加していた。特に、アゼルバイジャン在住のロシア人労働者の間には、ボルシェヴィキの革命思想がか

なり広まっていた。ボルシェヴィキの労働者達は、アゼルバイジャン人の革命的労働者や民族主義者を、ツァーリ権力に対抗する戦線に組み入れんとしたが、1900年初めの段階では、まだ期が熟していなかった。しかし、1916年中央アジアで勃発した現地人のツァーリに反抗する大暴動は、トランス・コーカサスにも影響し、散発的にはあったが、反乱が起った。やがて、ヨーロッパ戦線におけるロシア軍の戦況がおもわしくなくなってくると、アゼルバイジャンにもその余波がおしよせてくるのである。すなわち、食糧及び人員の強制調達である。

このため住民の生活は、ますます苦しいものになって行くのである。戦線におけるロシア側の戦力が低下するにつれ、アゼルバイジャンは複雑な地位に立たされることになった。すなわち、ボルシェヴィキ労働者達はアゼルバイジャンの労働者、住民を一体としてツァーリの軍隊に立ちむかわせようとするし、一方メンシェヴィキはこれと対立し、またトルコはこの間に、バクーの油田地帯を支配下に組み入れることを考えるのである。

ボルシェヴィキの立場からすれば、とにかくアゼルバイジャンにボルシェヴィキの政策を支持する政治権力が樹立されさえすればよかったのである。それがアゼルバイジャン住民の愛国的な動機によるものであろうと、単にボルシェヴィキに踊らされ、付和雷同したものであろうと、それは一向にかまわなかった。第一次世界大戦の開始から、1917年二月革命までの間のアゼルバイジャンの情勢は、政治的にも経済的にも、ほとんど完全といってよいほどツァーリズムの支配下にあり、アゼルバイジャン的なものは、それほどみられなかったのである。

二月革命の影響は、アゼルバイジャンにおいて、ツァーリの官憲及び特権的ロシア商人を動揺させるに十分であった。これら支配階級の手先とみなされていた人々は、ボルシェヴィキ労働者と妥協的な取引きをする一方、メンシェヴィキその他の政治勢力に可能な限りの援助を行った。二月革命から十月革命までの間は、ロシア本国において、いわゆる二重権力の時代と呼ばれるのであるが、辺境アゼルバイジャンにおいては、ボルシェヴィキは実質的な権力の基盤

とはなり得なかった。これが名実ともに政治権力を掌握するのは、十月革命以降のことである。ボルシェヴィキが辺境民族に対して、如何なる政策をとったかについては、今日なお少なからず議論がなされているところである。

レーニンは民族自決権を全面的に認めていた。すなわち、完全な民族平等権と、すべての形式の民族的抑圧の撤廃を目差すことが、民族問題に関する党の基本的立場⁽²⁾であった。従って、アゼルバイジャンにボルシェヴィキ政治権力が確立されるのは、十月革命後の外国軍隊による干渉と、内乱を平定して行く過程とにおいてであった。

臨時政府のアゼルバイジャンにおける民族政策には、ツァーリのそれとほとんど変るところは見られなかった。二月革命から十月革命、内乱を経て、アゼルバイジャンにソヴィエト政権が成立するまでのアゼルバイジャン住民の生活は、文字通り労苦に満ちたものであった。革命を二月革命のレベルで終了させようとする臨時政府側と、真の労働者政権を樹立せんとするボルシェヴィキの闘争が、アゼルバイジャンにおいても展開された。特に、十月革命後、内乱時代に外国軍隊と赤軍とが、この地において衝突し、さらにトルコ側も革命後の混乱につけこみ、勢力の足場をつくろうとする動きを見せたことも、住民にとっては迷惑であったといえよう。

アゼルバイジャンにおいて、武装蜂起を直接指揮したのは、すでに知られている如く、ロシア社会民主労働党(ボルシェヴィキ)バクー委員会であった。中央委員エス・ゲ・シャウミャン、ペ・ア・ジャパリージェなどの作戦は、ロシア本国におけると同様、軍隊の革命化であった。ペトログラードにおいて、革命が成功すると、バクーにおいても、「全権力をソヴィエトへ」の要求がおこった。この時、バクー・ソヴィエトにおいては、まだボルシェヴィキが権力を掌握するにはいたっていなかったのである。ロシア社会民主労働党バクー委員会は、直接、労働者・兵士に呼びかけ、10月末、その圧力を背景として、バクー・ソヴィエトの全権力を掌握した。

従って、バクーにおけるソヴィエト政権は、直接の武装蜂起にはよらずに成功したといえよう。いわば、大衆のデモ、スト、サボタージュなどによる混乱

を利用したわけである。しかし、ロシア社会民主労働党バクー委員会は、その直接指揮下に数千人の赤衛軍部隊を持ち、またカスピ海方面における海軍も、革命軍の味方となっていた。それ故、事実上の武力は所有していたのである。だからこそ、権力奪取に成功したのであった。しかし、とにかく、1918年にボルシェヴィキ労働者の指導により、アゼルバイジャンの油田地帯バクーに、ソヴィエト政権が樹立⁽³⁾された。アゼルバイジャンの新政権の指導者としては、エス・ゲ・シャウミャン⁽⁴⁾がいた。10月革命の後で、アゼルバイジャンの民族主義者の中には、ボルシェヴィキの影響を受けない政権の樹立を望む者もいた。これらの中には、ボルシェヴィキもツァーリズムと同様に見なし、外国軍隊に対して、トルコ軍からの救援を名分⁽⁵⁾に干渉を求めた者もいるといわれている。この要請により、イギリス軍がバクーに進駐し、この時、アゼルバイジャン・ソヴィエトの指導的地位に者、あるいはコミッサールなど26名⁽⁶⁾が、イギリス軍の手により逮捕銃殺されたのである。

しかし、レーニンの指令により派遣された赤軍の抵抗によって、内乱はソヴィエト側の勝利に終ることとなった。いずれにしても、アゼルバイジャン住民は、ツァーリズムの過酷な植民地政策が終了するとともに、ソヴィエト政権の支配下に組み入れられるところとなったのである。ペトログラードの暴動に始った労働者の革命が、ヨーロッパ・ロシアで成功し、さらに辺境地区でも、外国干涉軍を排除して安定して行ったことは、レーニンにとっては喜びであるとともに、むしろ期待以上の偶然的な要素が多分にあった。レーニンはアゼルバイジャンの同志に対して、次のような書簡⁽⁷⁾を送っている。

アゼルバイジャン・ソビエト社会主義政府への電報

バクー

人民委員会議は、独立のアゼルバイジャン共和国の勤労大衆の解放を祝い、あわせて、つぎのような確信を表明する。独立のアゼルバイジャン共和国は、自国のソビエト政府の指導のもとに、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国と

共同して、東方の被抑圧諸民族の、のろうべき敵である帝国主義に対し、自己の自由と独立を守りぬくであろう。

独立のアゼルバイジャン・ソビエト共和国ばんざい！

アゼルバイジャンの労働者・農民ばんざい！

アゼルバイジャンとロシアの労働者・農民の同盟ばんざい！

人民委員会 議長

ウラジミール・ウリャーノフ

このようにして、ソヴィエト連邦の一国として、ロシア共産党の指導下に、形式的には独立国家として発足するのである。しかし、それはどこまでも、ソ同盟の一員としての独立であった。

13 アルメニア

アルメニアにおけるソヴィエト政権も、ツァーリズムとの闘争の過程であった。しかし、ここでは、他の二民族に比較して、民族的独立心が意外に強く、ボルシェヴィキの煽動とは別の独立運動も少なからず見られた。トランス・コーカサスにおいて、独自の伝統と文化を持っていることが、その理由として考えられる。特に、アゼルバイジャンとグルジアとは、アルメニアと歴史的に仲が悪く、またこれをロシア及び諸外国が利用するところとなったのである。ロシアはアルメニア人がキリスト教徒であるところからも、アゼルバイジャンに対するよりも、その植民地政策は比較的寛大であった。ロシアとしては、キリスト教徒のアルメニア人を、イスラム教徒のアゼルバイジャン人に対立させることによって、ツァーリズムに対する反感をそらせる政策であったと考えられる。ロシアがアゼルバイジャンを征服する時、アルメニア人は、ツァーリの軍隊と作戦をともにしている事実⁽⁸⁾もある。

従って、アルメニアとアゼルバイジャンの関係が友好的であるはずはない。ロシアとしてはアルメニアはアゼルバイジャンに対する番犬であった、ともい

えよう。事実、ロシアはアルメニアを利用して、回教民族たるアゼルバイジャンを抑圧したのである。しかし、ロシアにとって、ここにひとつの問題が生じた。すなわち、回教民族圧迫政策の手段として利用していたアルメニアが、ロシアの威信を背景に、グルジアやアゼルバイジャンに対して、軍事的にも経済的にも、強大化してきたことである。そこに、アルメニア民族主義者が気付かぬはずはなかった。ロシア革命の10年ほど前のことである。この頃からアルメニアが中心となって、ツァーリズム打倒のための革命組織のようなものが、少しずつアルメニアに出来始めるのである。これに対するロシア側の弾圧は、非常に冷酷なものであった。アルメニアがツァーリズムの忠実な奴隷でなくなってくると、ロシア側は、今度はアゼルバイジャンに対して支持を与え、アゼルバイジャン人の反アルメニア感情をあおりたてたのである。アルメニア、アゼルバイジャン、グルジアの三民族が互いに憎悪し合い続けたことが、ロシア帝国にとっては、好都合であった。このような状態は、第一次世界大戦中も続き、ロシアはこの地方においては、比較的楽に戦争用の物資、人員を徴発することが可能であった。

しかるに、ヨーロッパ戦線におけるロシア側の戦況が、おもわしくなくなると、ツァーリは戦線維持の為、新たに軍隊を派遣する必要にせまられた。1917年初め、ロシア国内では、国民は勝目のない戦争にあき、ひたすらパンと平和とを求めている。このような日常生活の中から、新たにヨーロッパ戦線用の軍隊を編成することは、不可能に近いことであった。ここに、ほとんど無傷のまま温存されていた植民地派遣軍の、ヨーロッパ戦線への転用が計られたのである。しかし、これは50年後の今日から見るならば、ツァーリズムにとって、極めて危険な戦略であったといえよう。大体、ロシア帝国の植民地というものは、例の南下政策によって、文字通り官僚と常備軍とによって、武力で勝ち取り、さらにその経営も、軍隊の常駐によって、達成されていたのである。従って、すでに見たように、ツァーリズムに対する反感は、これを経験したことの無い民族には、到底理解し得ないくらいはげしいものであった。その反感は、祖父から親へ、親から子供へと受け継がれて行くのである。

それ故、このような歴史的事実にもとづいて考えるならば、その植民地から軍隊が撤退するという事は、如何なる事態が生ずるか、自明のことであろう。現に、1900年代にはいると、各方面の植民地で、ツァーリ打倒の運動が起っており、アルメニアも例外ではなかった。しかも、アルメニア、アゼルバイジャン、グルジアの各民族は、互いに敵視し合っていたことは事実であるが、いずれも打倒ツァーリズムという点では、完全に一致していた。

トランス・コーカサスにおいては、多年の民族的対立にもかかわらず、ペトログラードからの支配離脱、各民族の独立、といった気運がもり上っており、ボルシェヴィキ労働者、民族主義者による煽動といったものも、公然と行われていた。こういう状況の中で、ロシア2月革命が勃発したのである。この影響は直ちに辺境のトランス・コーカサスにも及び、ボルシェヴィキと民族主義者による革命の指導が、強力に行われた。しかも、このツァーリズム打倒の嵐の中で、ロシア帝国の植民地派遣軍が、トランス・コーカサスからすべて撤退してしまつたのである。

すなわち、2月革命で成立したケレンスキー政権の擁護と、あくまでも戦争継続政策をとる臨時政府の戦略の為、トランス・コーカサスに駐留していた植民地派遣軍が、これにあてられたのである。アルメニアに駐屯していたツァーリの軍隊も、次々と引き揚げて行つた。トランス・コーカサスは、まさに無政府状態となつてしまつた。ボルシェヴィキや民族主義者にとって、この混乱こそ、多年にわたり、待ち望んでいたものである。アルメニアの民族主義者は、民族問題で永年にわたり敵視し合っていたアゼルバイジャン、グルジアと同盟を結び、一致して民族独立を確立せんとした。

一方、2月革命後、ロシア軍はペトログラード周辺に引き揚げたのであるが、さらに外国軍隊侵入の危険が、この地にはあつた。しかし、10月革命後、ペトログラードにソヴィエト政府が成立したのとは反対に、アルメニアでは、アルメニア民族独立を主張する国家主義者の一派が、実権を掌握したのである。この間、ボルシェヴィキと民族主義者は協力して、ツァーリと戦つたのであるが、ロシア軍撤退後に、主導権争いを展開し、ボルシェヴィキに率いられ

ていたアルメニア人の革命的諸政党は、国家主義者の団体、ダシナク⁽¹⁰⁾に敗れたのである。このダシナクに代表される勢力は、いわゆる民族ブルジョアジーで、ボルシェヴィキとはあい入れない仲であった。

1917年10月革命後、アルメニアではボルシェヴィキとアルメニア独立主義者との間で、はげしい主導権争いが展開されていた。この両勢力の闘争は、いわゆる大アルメニア主義なる民族運動を理解していなければ、本来の姿は明確に出来ないのであるが、この大アルメニア主義は、そもそもロシアの大ロシア主義の流れを汲むものであった。それ故、両者の衝突も、はなばなしのものであったといえよう。

ボルシェヴィキ側は10月革命当時、ロシア社会民主労働党地方委員会の直接の指揮下に、また民族ブルジョアジーに代表される反革命勢力は、外国軍隊の援助下にあった。反革命軍を指揮したアルメニアのダシナクは、赤軍との闘争に、外国から経済的援助を受けていた。例えば、チフリス駐在アメリカ合衆国領事スミスは、1917年12月13日付、アメリカ合衆国國務長官ランシング宛電報により、反革命軍への財政援助要請が、またイギリス政府からは、ダシナクに対し、1千万ポンド⁽¹¹⁾が支払われている。とにかく、このように外国勢力の干渉が公然と行われていたのであるから、それを考慮に入れずに、各民族の動向だけを見るのは、十分ではないと思われるが、それはいずれまたの機会に譲り、ここではアルメニア民族を中心として考えることにする。

さて、10月革命後に、ボルシェヴィキとアルメニア民族主義者、つまりダシナクは、ロシア帝国であろうと、ロシア社会民主労働党(ボルシェヴィキ)であろうと、とにかくロシア人の支配から離脱することを願ったのであるが、それは単独では非常に困難な仕事であった。そこで、反ロシアという点で、共通する感情を持つアルメニア、アゼルバイジャン、グルジアの三民族が、同盟して民族独立闘争を戦うことになった。すなわち、三民族全体を支配領域とする、いわゆるトランス・コーカサス連邦臨時政府の樹立である。それは1918年4月のことであった。

この連邦臨時政府は、ペトログラード・ソヴィエトに対して、ロシア人の支

配から離脱し、各民族の独立は達成された旨、通告を発した。すなわち、かつてのロシア帝国の植民地が、ロシア革命を機会として、次々と独立して行ったわけである。この、ロシア革命を機会に独立した、とはどういうことであろうか。大体、ロシア革命そのものが、第一次世界大戦を機会として勃発したものである。従って、アルメニアを初めとするトランス・コーカサスの民族独立運動は、レーニンの主張する「帝国主義戦争を内戦に転化せよ！」という呼びかけを、文字通り実行した、ということになる。

しかるに、この独立運動は、確かに今日の、いわゆる民族自治権にもとづく当然の要求であるかも知れないが、その真の目的は、要するにロシア人支配からの離脱以外の何ものでもないのである。ロシア帝国からの離反であると同時に、ソヴィエト・ロシアからの離反でもある。この点に関しては、帝政打倒の為、ツァーリズムの植民地と化した辺境諸民族の独立を説き、これを味方に引き入れたレーニンの民族理論から、当然に是認されるべきものであった。レーニンはトランス・コーカサスにおける民族独立の動きに対し、次のような書簡⁽¹²⁾を送っている。この内容が、レーニンの民族理論と何故に矛盾しているかが、重要な問題であろう。

アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア、ダゲスタン山岳共和国の共産党員の諸君へ。

カフカズのソビエト諸共和国に、心からあいさつをおくるにあたって、諸共和国の緊密な同盟が、ブルジョアジーのもとでは見られず、またブルジョア体制のもとでは不可能な民族的和合の手本をつくり出すであろうという期待を、あえて表明するものです。

ところで、カフカズの諸民族の労働者や農民の間の、民族的和合は、きわめて重要なものですが、なおそれ以上に、比較にならないほどに重要なことは、社会主義への移行としてのソビエト権力を維持・発展させることです。

.....

モスクワ, 1921年4月14日

ウラジミール・ウリャーノフ

すなわち、トランス・コーカサスの三民族は、ソ同盟の一員として、ソヴィエト権力の支配下になければならなかったわけである。しかも、それはまさしく世界最初の社会主義政治権力の為であった。

ところで、1918年4月のトランス・コーカサス連邦臨時政府は、最も致命的な欠陥を有していた。すなわち、臨時政府の政策を実現すべき強制力を保持していなかった。臨時政府の命令を実行すべき正規軍は、きわめて微弱なものであった。その上、外国軍隊、特にトルコの侵入を受けた。これはアルメニアにとって、決定的に不利であった。回教民族たるアゼルバイジャンは、連邦臨時政府の一員でありながら、トルコと共にアルメニアの立場を苦境におとし入れた。このため、臨時政府は、わずか1カ月余りで崩壊したのである。

その後、アルメニアでは、トルコを中心とする外国勢力が赤軍との闘争で敗れ、1920年代初めには、ボルシェヴィキがほとんど全権力を掌握するに至った。ボルシェヴィキは最初、アルメニア、アゼルバイジャン、グルジアを、ひとつの社会主義共和国とすることを考えていたのであるが、これは各民族の特異性からみて、非常に困難であり、結局のところ、各民族の自治共和国となったのである。この間の事情は、次の事実からも明らかであろう。

外カフカズ共和国連邦の創設問題についてのロシア共産党（ボルシェヴィキ）
中央委員会政治局の決議草案（抜萃）

11月28日

- (1) 外カフカズ共和国連邦の創設は、原則的には絶対に正しく、無条件に実現するものであるが、即時実行するのは時期尚早であると認める。すなわち、その討議と、宣伝と、下からのソヴィエト的方法による実施の為に、一定の期間が必要であると認める。
- (2) グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンの各中央委員会に対して（カフ

カズ・ビューローを通じて)連邦の創設問題を、なるべく広範囲に、党と労働者・農民大衆との討議にかけ、連邦支持の宣伝を精力的におこない、各共和国のソヴィエト大会を通じて、この宣伝をおこなうよう提議する。非常に多くの反対がある場合には、ロシア共産党中央委員会政治局に、正確かつ適時に報告すること。

ウラジミール・ウリャーノフ

これでわかるようにレーニンは、トランス・コーカサスにおける民族独立を、ソ同盟の一員としてしか認めていないのである。アルメニアでは、ソヴィエト政権が成立するのは1920年11月29日のことであった。

14 グルジア

最後に、今日のグルジア共和国におけるソヴィエト政権の樹立の過程を通じて、少数民族の問題を考えてみたい。グルジアが民族的に如何なる国家であるか、またその自然が如何なるものであるかについては、およそのことが、先に述べた通り⁽¹³⁾である。グルジアでは「大抵のものが貴族であり、大抵のものが貧乏人である」⁽¹⁴⁾という。やはり、他のトランス・コーカサスの民族と同様、ツァーリ・ロシアの植民地的状態を多年にわたり強制された。

グルジアにおけるロシア革命前の政治情勢は、アルメニアやアゼルバイジャンと同様であるが、ロシア人に対する反感は、これら二民族に優るとも劣らぬものがあつた。1917年の2月革命勃発後の、グルジアの主たる政治勢力は、メンシェヴィキであつた。ケレンスキー政権のもとで、グルジアのメンシェヴィキは着実に勢力を増していた。グルジアのボルシェヴィキは、主としてアゼルバイジャンのボルシェヴィキ、すなわちロシア社会民主労働党バクー委員会が、トランス・コーカサスにおける指導的立場にあつたが故に、これを指揮した。例えば、エス・ゲ・シャウミヤンやペ・ア・ジャパリージェ、エム・ア・アジスベコフ、イ・テ・フィオレトフ、ヤ・デ・ゼビン⁽¹⁵⁾等がその指導者で

あった。

これらのボルシェヴィキ指導者は、1917年10月革命がペトログラードで成功すると、トランス・コーカサスにおいても、武装闘争により、ソヴィエト権力を確立せんとしたのである。グルジアにおけるボルシェヴィキ労働者達は、ロシア社会民主労働党バクー委員会からの指令で、多くの場合動いていた。

これに対して、グルジアにおけるメンシェヴィキの活動はどうであったか。これには、当時のチフリス駐在アメリカ合衆国領事スミスが関係していた。すなわち、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンの三民族は、バクーのボルシェヴィキに対抗上、同盟を結成し、コーカサス委員会を樹立したのである。首席はゲゲチコリ⁽¹⁶⁾であった。すなわち、コーカサスをソ同盟から、分離させることをねらっていたわけである。これに対しては、当然に、ボルシェヴィキ側から反対があった。

ボルシェヴィキ武装部隊並びに赤衛軍部隊は、トランス・コーカサス全域において、1918年3月30日から3日間、反革命軍との戦闘に従事したのである。グルジアの大多数の住民は、メンシェヴィキ支持であった。グルジア人はボルシェヴィキ武装部隊並びに赤衛軍部隊に対して、最後まで徹底抗戦を行った。このため、グルジアの大寺院は大部分破壊、教会も500を数えるものが破壊されたという。また聖職者はほとんど処刑され、さらに市街戦に参加した多くの住民は、女子供も含めて、大量に虐殺されたのである。

その結果、1921年2月25日に、ソヴィエト政権がグルジアに成立した。当時スターリンは、ロシア社会民主労働党中央委員会内部で、すでに指導的地位にあった。スターリン、ペリヤはともにグルジア人である。グルジアにおけるソヴィエト政権は、ほとんどすべてのグルジア人の意思に反して、赤軍部隊の武力により、ソ同盟の一員に加盟させる、という過程を経て成立した、と考えてよい。革命政府側の文献は、赤軍が反革命軍を打倒し、グルジア人を救出したと主張するが、キリスト教徒が大多数を占めるグルジアにおいて、ほとんどの教会を破壊し、大正僧を含む高僧を、多数処刑したボルシェヴィキが、何故グルジア人にとって真の解放者であったのか、理解に苦しむところである。

トランス・コーカサスにおいて、最後まで赤軍に抵抗したのは、グルジア人⁽¹⁷⁾であった、ともいわれている。そして、赤軍に対抗するため、ドイツが武器弾薬、食糧などの援助を与えたという。しかし、今日のソヴィエト連邦の公式歴史書によれば、グルジアでは、国粹的ブルジョアジーがドイツの援助により、人民を弾圧し続けていたのを、赤軍が解放したのである、ということになっており、そうでない立場からは、赤軍が一方的にグルジア人をソ同盟に強制加盟させたのである、ということになっている。いずれが正しいか、相対的なものであって、ここで断定を下すことは困難であるが、当時すでに、政治局の事実上の支配者が、スターリンであったこと、さらにその後のスターリンの少数民族政策⁽¹⁸⁾を見るならば、やはり後者の見解の方が、より説得的であるように思われる。

以上のようにして、グルジアにおけるソヴィエト政権が樹立され、グルジア民族独立の名のもとに、ソ同盟の一員となったのである。アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアの三民族は、いずれも、トランス・コーカサスにおいて、外国軍隊に対するソ同盟の、国境警備隊の地位に甘んじさせられたことは、明白な事実であった。

さて、これでソヴィエト連邦内における少数民族の、ソヴィエト政権の成立過程を考察したわけであるが、百余の異民族を含むソヴィエト連邦にとって、民族問題は非常に重要な政策のひとつであった。その中でも、特に複雑なことは、宗教の異なる民族の対立であった。この問題は、社会主義と宗教という大きなテーマのもとに、いずれ深く究明しなければならないであろう。例えば、同じ社会主義国家内にありながら、キリスト教民族よりも、イスラム教民族の方が政治的自由が少なく、経済的にも、後進地域におかれている理由が何であるか、といった問題である。その為には先ず、社会主義とイスラム教の教義との関係を知る必要があるだろう。しかし、それはいずれ考えることとし、ここでは少数民族が、とにかく自治権を確立して行く過程を考察するにとどめる。

註

(1) 『城西経済学会誌』6巻3号、65頁。

(2) 全連邦共産党中央委員会編、田岡訳『全連邦共産党小史』263頁。

- (3) シェスタコフ著, 荒川訳『ソ連史』188頁。
- (4) 同書, 192頁。
- (5) 同書, 194頁。
- (6) 同書, 196頁。
- (7) レーニン著『東方諸民族の民族解放運動について』モスクワ・プログレス出版所(日本語版), 386頁。
- (8) 松川二郎著『中西アジア地政治誌』398頁。
- (9) 同書, 399頁。
- (10) シェスタコフ著, 前掲書, 192頁。
- (11) ソ連邦科学アカデミー歴史研究所編, アジア・アフリカ研究所訳『ロシア大10月革命史』357頁。
- (12) レーニン著, 前掲書, 429頁。
- (13) 『城西経済学会誌』6巻2号, 71頁。
- (14) 松川二郎著, 前掲書, 398頁。
- (15) ソ連邦科学アカデミー歴史研究所編, 前掲書, 353頁。
- (16) 同書, 355頁。
- (17) 松川二郎著, 前掲書, 402頁。
- (18) E. H. Carr, *The Bolshevik Revolution 1917—1923*, volume one, pp 363—369